

『道草』のベルクソン

——記憶の探求

佐々木 亜紀子

はじめに

日本においてベルクソン哲学を「正当な評価」をもつて最初に紹介したのは、西田幾多郎の「ベルクソンの哲学方法論」(一九一〇年)と「ベルクソンの純粹持続」(一九一一年)であるという。夏目漱石もまた同じころからベルクソンに関心をもち、講演、評論、談話、日記、断片、書簡のほか、**『思ひ出す事など』**(一九一〇年)でベルクソンに触れ、その著作に対して感服していたことが推せられる。そして**『道草』**(一九一五年)では、ベルクソンの哲学が「記憶に関する新説」⁽¹⁾として、次のように語られている。

彼は其青年に仏蘭西のある学者が唱へ出した記憶に関する新説を話した。

人が溺れか、つたり、又は絶壁から落ちようとする間に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、其頭に描き出す事があるといふ事実、此学者は一種の解釈を下したのである。

「人間は平生彼等の未来ばかり望んで生きてゐるのに、其未来が咄嗟に起つたある危険のために突然塞がれて、もう

己は駄目だと事が極ると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡ての過去の経験が一度に意識に上るのだといふんだね。その説によると」(四十五)

健三によって語られる「仏蘭西のある学者が唱へ出した記憶に関する新説」とは、ベルクソンの「物質と記憶」といわれているが、この本が高橋里美によつてはじめて邦訳されたのは、『道草』発表の前年一九一四年のことであつた。日本でベルクソンがよく知られるようになったのは、高橋による邦訳後であり、大杉栄らの翻訳も相俟つて、いわゆる「大正生命主義」のなかで、ベルクソンはブームになつたといわれる。

以上のようなベルクソン思想のブームのなかで『道草』は発表された。石崎等が述べたように、ベルクソンは「道草」の方法と構造を解く鍵のひとつ⁴と考えられる。本論ではベルクソンの記憶に関する説が単なる引用にとどまらず、『道草』全体に関わるものであることを明らかにしてゆきたい。

一 ベルクソンの「夢見る人」

漱石が作品のなかでベルクソンに言及した最初は、『思ひ出す事など』(三)(一九一〇年一月八日)であるが、これはいわゆる修善寺の大患(同年八月)後、初めて発表された作品である。自分の治療にあたつていた長与院長が既に亡くなつていることを知り(『思ひ出す事など』二)、「明日の朝」^{あさるひ}、「ジエームス」教授の計に接し、病床で「教授が仏蘭西の学者ベルグソンの説を紹介する辺りを、坂に車を転がす様な勢で駆け抜けた」(同三)ことを記したものである。そしてこの章段の末尾には、「教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一巻が昨今漸く英訳になつてゾンネンシャインから出版された。其標題は「Time and Free Will(時と自由意志)」と名づけてある。」と付記がある。熊坂敦子が「ベルグソンの思

考を極めて自然に受け入れる状態⁽⁵⁾と述べたように、いわば「余が無事に東京まで帰れたのは天幸」(同二)との境地のなかでベルクソンに興味を抱いているのである。

そののち、漱石が「*Time and Free Will*」を実際に読み始めたのは、日記によれば、一九一一年六月二十七日である。「昨日ベルグソンを読み出して」「数」の篇に至つたら六つかしいが面白い、もつと読みたいが今日は講演の頭をと、のへる都合があつて見合せ」(六月二十八日)とあり、七月一日にも「ベルグソンの『時間』と『空間』の論をよむ」とある。この書にはことのほか感銘を受けたらしく、扉に「第二篇ノ時間空間論ヲ読ンダ時余ハ真に美クシイ論文ヲ思ツタ」と漱石は記している。

『道草』の「新説」の部分は、「物質と記憶」第三章との注があるが、正確な引用とは言いがたい。だが篠原資明が「ベルクソンも、一種の臨死体験に何度か触れていた。事故や処刑により死にかけた人が、忘れたはずの過去がよみがえるのを経験したという報告に、注目したのである⁽⁶⁾」と述べるように、ベルクソン哲学の要所であったといえる。そして『物質と記憶』第三章「イマージュの残存について——記憶と精神」のなかの「過去と現在の関係」⁽⁷⁾の部分は、小宮豊隆⁽⁸⁾をはじめとする以前の注のとおり、健三のことにはもつとも該当する部分といつてよく、漱石はどこかでこの書を部分的にしろ、読んでいたのである。

ただし「漱石山房蔵書目録」には、「*Time and Free Will*」「*Creative Evolution*」「*Laughter*」⁽⁹⁾があるにもかかわらず、この書はなく、日記などにも読書記事は見あたらない。当時の英訳は「*Time and Free Will*」と同じSwan Sonnenschein版の「*Matter and memory*」⁽¹⁰⁾があるので、漱石が手に取ったものとして、この書が最も可能性が高いと推定される⁽¹¹⁾。この「物質と記憶」をもう少し詳しくみてみよう。

健三の語った「記憶に関する新説」の部分に先立って、ベルクソンは記憶をめぐる「二つの極端な状態」⁽¹²⁾〔two extremes〕を想定している。すなわち「行動の人 (homme d'action)」〔the characteristic of the man of action〕と「夢見る人 (un rêveur)

(傍点は原文に拠る)「*dreamer*」あるいは「自動人形」[*automaton*]と「夢見るような人間存在(傍点は原文に拠る)」[*A human being who should dream his life*] である。

「行動の人」「自動人形」とは、「与えられた状況を救援するために、その状況に係わるすべての想起を呼び寄せる時の迅速さ」と、「役に立たないか重要でない想起が識閥(*ego*)に現れながら」「乗り越えがたい障壁」に「突き当たる」という特徴をもつ。一方「夢見る人」「夢見るような人間存在」とは、「行動にほとんど適応しておらず」、「現在の状況の利益となることなく意識の光に照らされて浮かび上がる」といった想起をする人である。そしてこの「夢見る人」として例示されたものが、「いくつかの夢や夢遊症状態における記憶の「高揚」であり、「溺れた人や首を吊った人における突然の窒息において時に生じること」であるとして、次のように続けて論じている。

自分の歴史の忘れられていたすべての出来事が、それらのこのうえもなく微細な事情を伴い、しかも、それらが起こったまさにその順序で、わずかな時間に自分の前に次々と現れるのを見た、と蘇生した患者は明言している。

自分の存在を生きる代わりに夢見るような人間存在(傍点は原文に拠る)は、おそらくこのように、自分の過去の歴史(傍点は佐々木に拠る)の限りなく多くの細部をあらゆる瞬間に自分の眼差しのもとに留めておくだろう。

これはもちろん「極端な状態」の一方であって、ベルクソンは「これらの二つの極端な状態は、例外的な場合にしか、互いに孤立することはないし、十全に現出することもない」とも述べている。

健三が青年に「記憶に関する新説」を話したとき、「青年は健三の紹介を面白さうに聴いた」ものの、「彼は、それを健三の身の上に引き直して見る事が出来」ず、「健三も一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた」という。しかし健三は「前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行

くやうに見えた」青年と、「自分の内面生活とを対照し始めるやうになつ」(四十五)ている。石崎が既に述べたように「健三の「未来」とはあるゆきづまりの状態を示しており、引用したベルグソンの記憶説の紹介も(中略)健三の危機を象徴している」⁽¹²⁾のだ。ベルクソンのいう「夢見る人」のように「極端な状態」でないものの、「危険な境遇に置かれたもの」に近づいていることを健三は自覚している。健三はある種のクライシス、すなわち危機、難所であると同時に重大な人生の岐路に立っているのだ。それは「道草」のなかで「自分の過去の歴史」を書く漱石の自覚でもあつたはずだ。

二 東京高等工業学校での講演

漱石が「道草」にベルクソン哲学を引き入れた契機のひとつとして注目したいものに、東京高等工業学校での講演がある。この講演は「道草」発表の前年一九一四年一月一七日に同校文芸部の依頼でおこなったものである。

岩波書店一九九六年版『漱石全集第二十五巻』で「おはなし」と題されている講演⁽¹³⁾で、漱石はベルクソンに触れてまず次のように語っている。

あなた方は専門としては、此の方面ではないけれ共、此の会は文芸の会で、ベルグソンなども出る様ですから此の事については共通してゐる様にも思はれます。

これは中沢臨川が「ベルグソンの文藝及道德観」と題した講演を漱石とともに同校でしたからであろう⁽¹⁴⁾。続けて漱石は聴衆の学生たちの仕事を「普遍的即ち universal」とし、「私共の方は universal でなくて personal の性質を持つてゐます」とした上で、次のように述べる。

然らば我々の文芸は法則を全然無視してゐるかと思ふと、然様でもない。ベルグソンの哲学には一種の法則みたいなものがある。フランスでは、ベルグソンを立場として、フランスの文芸が近頃出てきてゐる。(中略)吾々の方でも時には法則が必要で、何故に必要であるかと云へば之がために作物の depth が出てくると云ふ問題になるからである。あなたの方の法則は universal のものであるが吾々のものは personality の奥に law があるのです。

ここでの「ベルグソンを立場として、フランスの文芸が近頃出てきてゐる」という漱石の発言に対しては、大野淳一が「フランスの小説家ブルースト (Proust, Marcel, 1871-1922) をさすと思われる。彼はパリ大学でベルグソンの講義を聴講している。長篇小説『失なわれた時を求めて』の初篇『スワン家の方へ』の出版は、この談話の前年(一九一三年)である」と注記している。漱石がブルーストについての情報をもっていたかは不明だが、ベルクソン・ブームのなかでブルーストをさした評言があつたであろうことは想像に難くない。

漱石はベルクソン哲学を文芸に應用するヒントを、聴衆の「青年」たちをまえに講演をしたあたりで掴み、翌年『道草』で試みたのではないだろうか。というのは、この講演には後日談がある。

ある文学士が来て、「先生は此間高等工業で講演をなすつたさうですね」といふから、「あ、遣つた」と答へると、其男が「何でも解らなかつたようですよ」と教へて呉れた。(中略)彼に関係のある或家の青年が、その学校に通つてゐて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないといふ言葉で彼に告げたのである。(『硝子戸の中』三十四)

學生に理解されなかつたらしいと「失望」した漱石は、講演を引き受けたことを後悔した旨を、続けて『硝子戸の中』のこの章で語つた。一九一五年二月一八日の『朝日新聞』紙上である。すると東京高等工業学校の學生からその「失望を

打ち消すやうな事実を、反証として書いて来て呉れた」「四五通の手紙」が送られてきたため、『硝子戸の中』の単行本版（一九一五年三月二八日）からはそのことを説明する付記がなされた。

此稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取つた。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いづれも私が此処（『硝子戸の中』三十四を指す……佐々木注）で述べた失望を打ち消すやうな事実を、反証として書いて来て呉れたのである。だから其手紙はみな好意に充ちてゐた。（中略）それで私はこゝに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて私の誤解を正してくれた人々の親切を有難く思ふ旨を公けにするのである。

『硝子戸の中』のなかのこの付記がいつ書かれたかを特定することはできないが、『硝子戸の中』三十四章初出の二月八日と単行本化の三月二八日との間であつたはずである。『道草』の連載は『硝子戸の中』単行本化の約二ヶ月後の六月三日から始まつた。『道草』のなかで「記憶に関する新説」が「青年」に対して語られたのは偶然ではない。この「新説」は自分の講演に対して厚意ある応答を寄せた東京高等工業学校の学生に対してのメッセージを含んでいたのだ。『思ひ出す事など』でははっきりと示したベルクソンという名を、『道草』では故意には出さなかつた。名は出さずとも、講演をよく理解したことを「反証として書いて来て呉れた」「好意に充ち」た手紙を送つてくれた学生等にはきつとそれが誰のことなのかを知ることができたであらう。『道草』を起草し始めた漱石は、そこで学生に話した「作物の death」を出し「personality の奥に law」をもつ「ベルクソンを立場」とした文芸を試みてみせた。その意味でもベルクソンは『道草』を「解く鍵のひとつ¹⁸⁾」となつているのである。またこれはバフチンのいう「隠された対話関係」ともいえる。

一方の対話者は目に見えない形で参加していて、彼の言葉そのものは存在しないのだが、彼の言葉の深い痕跡がも

う一方の対話者の実在する言葉をすべて規定しているのである。¹⁹⁾

『道草』とはいわば漱石と学生たちとの「隠された対話」であり、学生たちは「目に見えない形で」「青年」の後景として『道草』に参加しているのだ。

三 片付かない記憶

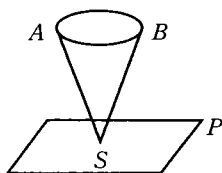
『物質と記憶』第二章「イマージュの再認について——記憶と脳」において、ベルクソンは「理論的に独立した二つの記憶」について論じている。

ひとつは「どんなに細かな部分も疎かにせず、各々の事象、各々の所作にその位置と日付を与え」「有用性または実利的・適用の底意を持つことなしに、自然的必然性の効果だけによって」「過去を蓄える」「イマージュ想起 (images-souvenirs) の形で記録する」記憶。もうひとつはこの「第一のものは非常に異なった記憶」で「つねに行動へと差し向けられ、現在のうちに据え付けられ、未来だけを見つめている」「反復する (répéter) (傍点は原文に拠る)」記憶である。

ベルクソンが重視するのは、もちろん第一の記憶であり、「純粹記憶」あるいは「純粹想起 (souvenir pur)」(pure memory) と訳されている。それは現実によって覆い尽くされてはいるが、確かに持続しているとベルクソンはいう。「私が物質的対象を知覚するのをやめるとき物質的対象は存在するのをやめるのだと想定する理由がなくなるのと同様、過去はひとたび知覚されれば消えてしまおうと言う理由も存在しなくなるだろう」と。

そして記憶は現在を一瞬ごとくのみ込みながら未来へと「持続 (durée)」(duration) する。ベルクソンは「すべての知覚はすでに記憶なのである。われわれは、実際には、過去しか知覚していない。純粹な現在には、未来を侵食する過去の捉

え難い進展なのである（傍点は原文に拠る）、あるいは「この記憶は（中略）決定的な過去のなかでまさに現実に活動している」と説き、図を示して「過去と現在の関係」を次のように述べる。



私が、円錐 SAB によって、私の記憶のなかに蓄積された想起の全体を表すとすれば、過去のなかに据えられた底面 AB は不動のままであるのに対して、あらゆる瞬間に私の現在を描く頂点 S は絶えず前進しており、同様に宇宙についての私の現在の表象の動的平面 P に絶えず触れている。身体のエマージュは S に凝縮される。

このように「記憶のなかに蓄積された想起の全体」 SAB は現在 S の背後に厚みをもって控えている。この円錐 SAB を「道草」において象徴するのは「書付の束」である。

「書付の束」とは健三の「御父さまが後々の為にちやんと一纏めにして取つて御置になつた」「あの人に關係した書類」の束である。兄が「用算筒の抽匣の中」（三十二）から出してきたもので、「惣体が茶色がかつて既に多少の時代を帯びてゐる上に、古風なかんじん燃で丁寧な結び目がしてあつた」（三十）という。束は「手続き書と書いたもの」、「取り替え一札の事と書いたもの」、「約定金請取の証と書いた半紙二つ折の帳面」（三十一）、「島田との懸合に就いて必要な下書らしいもの」（三十二）といった島田に関わるものほかに、「小学校の卒業証書」、「賞状」（三十一）そして「御由の送籍願」や兄の亡くなった長女の「出生届の下書」（三十六）までが一纏めになつていた。「書付の束」には、「純粹記憶」と同じく「有用性または実利的適用の底意を持つことなしに」、「不必要なものが紛れ込んでゐる」（三十六）のだ。それは健三の現在のすぐ後方に厚みをもって控えており、未来においても消えることはない。現在を一瞬ごとくのみ込みながら未来へと「持続」する。

そして健三がその書類を「元のかんじん燃で括らうとした」ところ、「其かんじん燃はぶつりと切れ」てしまふ。雑多な過去の切れ切れは、島田をきつかけにして、こうしてあふれ出そうとするのである。だが切れしまった「かんじん燃」の代わりに、「細君は赤と白で擦つた細い糸」で絡げてくれる（三十三）。「茶の間」（三十五）に保管してあつたこの書付の束の中に、最後には島田から受け取つた二枚の「書付」を新しく加えて御住は「簞笥の抽斗に仕舞つて置」（百二）く。ベルクソンのいう「あらゆる瞬間に私の現在を描く頂点Sは絶えず前進」して肥大していく円錐SABと同じように、刻々生きる健三の現在の背後で「書付」も増えてゆくのだ。

だが「書付の束」が「片付いた」ようにみえても「片付いたのは上部丈」（百二）で、「抽斗」のなかには確かに現存し続ける。それは「知覚するのをやめるとき物質的対象は存在するのをやめるのだと想定する理由がなくなるのと同様」（「物質と記憶」）に「持続」する。島田の件で比田の家を兄と訪ねた健三は、「自分の背後にこんな世界の控えてゐる事を遂に忘れることが出来なくなつた。此世界は平生の彼にとつて遠い過去のものであつた。然しいざという場合には、突然現在に変化しなければならぬ性質を帯びてゐた」（二十九）ということに気がついている。「一遍起つた事は何時迄も続く」という健三のことは、ベルクソンのいう記憶の「持続」のことでもあるのだ。記憶は決して「片付きやしない」（百二）。「道草」が繰り返す「片付かない」（九十四）という語は、記憶についてのことでもある。

四 「悪い記憶の持ち主」

富士川義之はサムエル・ベケットの『プルースト』と吉田健一の『東京の昔』とを引用して、「Proust had a bad memo-ry」との評言を紹介し、プルーストを「悪い記憶の持ち主」と呼ぶほかない、いわゆる良い記憶の持ち主とは決定的に位相を異にする記憶の持ち主だというのが、吉田氏及びベケットの所論にほかならないのである²⁾と説明する。

『道草』もまた、年代記的に過去を差し出すことがないばかりでなく、健三の記憶の歪みもその空白さえも補正しない点では「悪い記憶の持主」というほかないだろう。

たとえば、健三の養母御常はその記憶のなかで非常に醜悪だが、実際に健三の前に現れた御常は「全く変化してゐた」（六十二）という。健三が予期した恩着せがましさや「困つたとか、窮したとかいふ弱い言葉」もなく「平静」な「物語り」をし、「五円紙幣」という「健三からの贈りものを受け納め」（六十三）で御常は帰っていく。御住が指摘するように「貴夫の考へてゐた女とは丸で違つた人になつて貴夫の前へ出て来た」のである。それを「違つたのは上部丈で腹の中は故の通り」だとし、「己の批評の正しさ加減」（六十五）を健三は主張するのだが、そのことばに説得力はない。健三の記憶における歪みが可能性としてここで明かされている。

また「斯んな光景をよく覚えてゐる癖に、何故自分の有つてゐた其頃の心が思ひ出せないのだらう」（十五）という感慨。「舞台が急に変つた。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた」、「健三の記憶は此所でぶつりと切れてゐた」、「其時代の彼の記憶には、殆んど人といふものの影が働らいてゐなかつた」（三十九）、「自分の新らしく移つた住居については何の影像も浮かべ得なかつた。「時」は綺麗に此侘びしい記念を彼のために払ひ去つてくれた」「彼女（御常を指す……佐々木注）は又突然健三の眼から消えて失くなつた」など、記憶に現実感が伴わないことが強調される。「考へると丸で他の身の上のやうだ。自分の事とは思へない」（四十四）という健三の思ひは、記憶の空白を示している。しかしこれらの空白は放置されたままで補われることがない。転居も離別も記憶の断絶のなかで語られる。

そして健三は「今の自分は何うして出来上つたのだらう」と問いながら、不思議の感にうたれたままである。職業から推量すれば、「給仕になんぞされては大変だ」と「心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した」（九十一）学生時代以来の勉強、地方での仕事、外国における研究などの刻苦勉勵に因るはずだが、その記憶が欠落しているのだ。

「自分は其時分誰と共に住んでゐたのだらう」

彼には何等の記憶もなかつた。彼の頭は丸で白紙のやうなものであつた。けれども理解力の索引に訴へて考へれば、何うしても島田夫婦と共に暮したと云はなければならなかつた。(三十八)

ここでは辛うじて「理解力の索引」で補いながらも、記憶の欠落が強調されている。これらの問いの形は「道草」冒頭から続く作品全体の音調となつてゐる。「健三が遠い所から歸つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう」という問いは、記憶の欠落をも意味している。

『道草』が「悪い記憶の持主」であるというのは、欠落や空白のほかに、記憶の脈絡のなさ、無意味さにも起因する。たとえば島田の件の相談で久しぶりに姉を訪ねたとき、健三はその家で「古い額」から「子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向け」(四)、再び訪ねたときも比田の出してきた「古い本」から「江戸名所図会」を見ていた頃の「懐かしい記憶」に思いを馳せ、そして「駿河町といふ所に描いてある越後屋の暖簾と富士山とが、彼の記憶を今代表する焼点とな」(二十五)る。彼はいつも本来の目的から遠ざかつて記憶を辿り始めるのだ。ベルクソンはこのような脈絡のない想起について「過去のなかに生きる人は、行動にほとんど適應しておらず、その人において、想起は現在の状況の利益となることなく意識の光に照らされて浮かび上がる。それはもはや衝動的な人ではなく、夢見る人 (*un rêveur*) (傍点は原文に拠る) である」という。

また、「書付の束」のなかにあつた「御由の送籍願」からは、「慙愧の眼をもつて当時の自分を回顧」し(三十六)、「賞状」は健三にひとつの記憶を呼び起こさせる。

彼は(中略)喜びの余り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の晩夢に見た着い龍と白い虎の事も

思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。(三十一)

島田の問題のために集まつた場面としてはあまりふさわしい回想ではないといえよう。いわば「有用性または実利的適用の底意を持つこと」のない「純粹記憶」の回想なのである。またここで健三には「遠い」はずの過去が「甚だ近く見え」ている。これはベルクソンが「時間の隔たりを飛び越えることが私の意識にとつては有効であ」り、「われわれの想起は時間的な不連続な仕方では照らし出される」と述べていることにながつていよう。

以上のような「道草」のなかの記憶の歪み、空白、欠落、脈絡のなさは、小説表現のありかたからいえば、清水孝純のいう「迂言法」^{ペリフラージュ}、あるいは亀井俊介のいう「曖昧さ」ということができよう。しかしそれは記憶というものの「一種の法則」(「おはなし」)でもあるのだ。ベルクソンは「想起は見たところ気まぐれな順序で現れる」ことについて次のように述べる。

われわれの古の諸知覚は、完全に失われているか、あるいはまた、気まぐれにしか再び現れないとの印象をわれわれに与える。しかしこの完全な破壊あるいは気まぐれな甦りの外観は、現在の意識が各瞬間に有益なものを受け取り、余計なものを一時的に締め出すことに単に由来する。

あるいは「脳は有用な想起を引き起こすことに貢献しているが、更にそのうえ、それ以外の想起のすべてを一時的に斥けることにも貢献している」と説明する。要するに「道草」は過去がいかなるものであつたかを探求しているのではなく、記憶とはいかなるものであるかを探求しているのである。先にふれた吉田健一は、「古木君」のことばとして「Proust had a bad memory」との評言に続けて「それにブルーストは思ひ出してゐるんぢやなくて記憶の作用をしつこく分析し

てゐるんでせう」と語らせている。

五 「自動人形」から「夢見る人」へ

漱石の作品のなかで、『硝子戸の中』と『道草』とは、自身の生い立ちが表出された点で突出している。『硝子戸の中』に関しては、重松泰雄の指摘どおり「第十四章以後、堰を切ったように過去の回想が現れてくる」。重松は漱石の「構想メモ」を検討したうえで、過去回想の契機を木下空太郎の『唐草表紙』（一九一五、正確堂）との「貴重な出会い」に帰し、「春の陽だまりのような温もり（傍点は原文に拠る）」の要素を『硝子戸の中』に確認している。だが「過去の回想」へ向かった漱石が対面したものの多くが、既に失われたものであったことも事実であろう。『硝子戸の中』には実に多くの「死」が書き連ねてあるのだ。前半部では「ヘクトー」の死（五）に始まり、「死といふ境地に就いて常に考へてゐる」（八）とあって、後半では「高田」（十六）、「御作」（十七）、「社の佐藤君」（二十二）、「楠緒さん」（二十五）、「益さん」（二十六）、「二代目」の猫、「好い犬」（二十八）、「長兄」（三十六）の死が語られる。ほかにも「一番目の姉」（十四）、「父」（二十三）、「母」（三十七、三十八）といった亡くなった肉親にまつわる話が多く、生家さえ取り壊されて、「時」は力であった（二十三）という結論に達している。「母の記念の為に此所で何か書いて置きたいと思ふ」（三十七）と連載の終わり近くに記したのは、数々の喪失を前にした漱石の偽らざる感慨であろう。

このように『硝子戸の中』では「過去の回想」を通じて喪失に向き合った漱石であるが、その連載終了の翌月、京都に旅行し、そこで胃病を悪化させて病床に伏したことはよく知られている。その間に異母姉の高田ふさが亡くなったが、葬儀に参列することすらかなわなかった。『道草』の執筆はそれから約二ヶ月後の五月に始まる。『硝子戸の中』で多くの喪失を語ったところに、肉親の死と、自身の身体的危機とが加わり、「危険な境遇に置かれた者」との自覚が芽生えたとして

も不思議ではない。「未来が咄嗟に起つたある危険のために突然塞がれて、もう己は駄目だと事が極ると、急に眼を転じて過去を振り向く」という「記憶に関する新説」(四十五)の件は実感をともなうて感じられたであろう。

こうして「過去を振り向く」いて書かれた『道草』は、漱石の年譜的事実を照らせば、一九〇四年から翌年にかけてが中心的に描かれている。ほぼ十年前をモデルにしなが、さらに健三が幼児期などの記憶を辿っている。(漱石―健三―その幼児期)という入れ子型構造は、『道草』と前作の『硝子戸の中』との隔たる点である。『硝子戸の中』の「私の記憶」(『硝子戸の中』三十八)は書き手のものであるが、『道草』の「記憶」は健三のものである。『道草』の入れ子型構造は、『道草』が三人称小説であることとかわる。加えてその小説の設定時期として、十年前に既に「吾輩は猫である」で取り上げた時期を再度選んだのは、記憶とは何かを最も有効に探求するための必然性があつたと考えられる。

小宮豊隆は「道草」を「自叙伝小説」としたうえで、設定された時期について次のように述べている。

臆測を逞うすれば、『硝子戸の中』で幼時を追懐する事に活らき出した漱石の心は、幼時の追懐を機縁として、過去の自分の生活を全体として振り返り、その中に出没する醜い「私」を検討しつつ、『道草』に於いて、自分の最も苦しかつた、それだけに又自分が最も愛著を感じてゐる時期を切り取つて来て、その上に更に鋭い検討のメスを振はうとしたものに違ひないのである。

もちろん『道草』を単に体験をなぞつた「自伝的小説」とすることは否定されるだろう。だが「遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つた」ころを、「自分の最も苦しかつた、それだけに又自分が最も愛著を感じてゐる時期」として、漱石が選び取つた必然について考察していることは注目される。

また、蓮見重彦は『道草』で「執筆体験そのものが、すでにノートの字の「細かさ」との対比で隠喩的に語られていた」

ことを指摘している。そのうえで、「芸術を信じる者の孤独な善意によってではなく、金銭との交換を期待する者」すなわち島田が、「講義ノートの準備とは異質の執筆行為がもたらす有利な交換の可能性に目覚めさせた」とし、それゆえ島田は「新たなエクリチュールの起源³⁰」であるとしている。健三は『道草』のなかで新しい「執筆体験」をし、その行為の別の「可能性に目覚め」て変容を遂げているのだ。漱石にとつての『道草』の設定時期は、小宮のいう「愛著を感じてゐる時期」であり、「新しいエクリチュールの起源」としての時期とも言い換えられるだろう。

『道草』の冒頭近くには、健三の生活の規則性が、「千駄木から追分へ出る通りを日に二返づ、規則のやうに往来した」(一)、「器械のやうに又義務のやうに何時もの道を往つたり来たりした」(二)、「もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往来する丈」(三)と繰り返し強調される。これはベルクソンのいう「意識を有した自動人形」に相当する。

記憶を、それが生み出すすべてのものと一緒に捨てる人は、自分の現実存在を實際に表象する代わりに、自分の現実存在を絶えず演じる(傍点は原文に拠る)だろう。意識を有した自動人形であるそのような人は、刺激を適切な反応へと引き継ぐ有益な諸習慣の傾向に従うだろう(傍点は佐々木に拠る)。

「彼の心は殆んど余裕といふものを知らなかつた」(二三)、「其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。さうして島田の事は丸で忘れてしまつた」(八)にも、「有益な諸習慣の傾向に従う」健三の「自動人形」らしさが表れている。この「自動人形」の変容は、通勤途中に見た「帽子を被らない男」、蓮見のいう「エクリチュールの起源」たる男との再会から始まる。健三は「不幸な過去を遠くから呼び起す」(二)ようになり、「吉田と会見した後の健三の胸には、不図斯うした幼児の記憶が続々湧いて来る事がある」(十五)り、御縫さんの話題から記憶のなかに沈潜して、御住の問いかけに「追

憶の夢を愕ろかされた人のやうに」(二十三)なる。ベルクソンが「自動人形」に対立するものとして想定した「夢みる人」に、健三は近づきつつあることが判る。「健三も一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた」(四十五)とはいうものの、「彼は其間に時々己れの追憶を辿るべく余儀なくされた。自分の兄を気の毒がりつゝも、彼は何時の間にか、其兄と同じく過去の人となつた」(三十八)とあるように、健三は「過去を振り向く」(四十五)者となつてゐるのだ。

そしてこの変容の明確な契機は、謹厳なあの「規則のやうに往来」しなければならぬ生活からの解放である。「細かいノートより外に何も作る必要のなかつた彼」が、「筆の先に滴る面白い気分^①に駆られ」て「長い原稿」(八十六)を書いてから、次第に変容していく。「ペネロピーの仕事」ともいうべき「半紙」(九十四)との格闘を捨てて、「彼は帽子を被つて寒い往来へ飛び出し」(九十六)、「店頭を、それからそれと覗き込んで歩」き、「硝子越に何の意味もなく長い間眺めてゐ」(九十七)たり、新年に「普通の服装をしてぶらりと表へ出」て、「絵を描いた」りし、帰る途中で「不図何か書いて見やうといふ気を起した」(百一)りする。東郷克美が既に指摘したように、「それが、「書齋」の外の「往来」で発想されるのも決して偶然ではない^②」のだ。健三は「規則のやうに往来」し「仕事に忙殺」する生活から、「ぶらりと表へ出」て「何の意味もなく」過ごすようになつてゐる。ベルクソンのいう「自動人形」からの変容である。

漱石にとつての一九〇四年頃もまたベルクソンのいう「自動人形」からの変容を遂げた時期であつたのだ。もちろん先にも引用したとおり、「自動人形」と「夢見る人」とは「二つの極端な状態」であるので劇的で完全な移行があつたわけではない。だがやはり記憶がいかなるものかを探求するには、「自動人形」から「夢見る人」という二つの状態に揺れたこの時期を選ぶ必要があつたのだろう。

そして「危険な境遇に置かれたもの」に近づいてゐることを自覚していた健三と同様に、「道草」を書く漱石もまたその自覚を抱いて記憶を見つめていた。「夢見る人」とは、「片付かない」記憶を「自分の眼差しのもとに留める」人であり、

クライシスに瀕した人でもある。「道草」が完結したものとしては漱石の最後の長篇小説となったのは、必然といわねばならないだろう。

注

- (1) 久米博「いま、ベルクソンを読む——記憶・文学・忘却」(久米博・中田光雄・安孫子信編『ベルクソン読本』法政大学出版局、二〇〇六)。
- (2) 夏目漱石の作品の引用はすべて『漱石全集』(岩波書店、一九九三～一九九九)に拠る。ただし引用においては、旧字体を新字体に改め振り仮名を省略した部分がある。他の引用についても同様。
- (3) 高橋里美訳／ベルクソン著『物質と記憶』(星文館、一九一四)。
- (4) 石崎等『漱石の方法』(有精堂、一九八九)。
- (5) 熊坂敦子『漱石とベルクソン』(『國文学』一九七一・九)。
- (6) 篠原資明『ベルクソン——(あいだ)の哲学の視点から』(岩波書店、二〇〇六)。
- (7) 引用は「物質と記憶」(アンリ・ベルクソン著／合田正人・松本力訳、筑摩書房、二〇〇七)に拠る。特に注がなければ、ベルクソンの引用はすべて同書に拠る。ただし適宜英訳版(注10)を参照し、「」で示した。
- (8) 一九六六版『漱石全集 第六卷』(岩波書店) および、石原千秋「注解」(『漱石全集 第十卷』岩波書店、一九九四)参照。
- (9) 「漱石山房蔵書目録」(『漱石全集』岩波書店、一九九七)参照。
- (10) Matter and memory/by Henri Bergson: authorized translation by Nancy Margaret Paul and W. Scott Palmer. London: Swan Sonnenschein New York: Macmillan, 1911 (東北大学図書館所蔵)。
- (11) ただし大久保純一は漱石が高橋里美の訳書(注3参照)を読んだ可能性を示唆している。
- (12) 注4に同じ。
- (13) ただし『浅草文庫 第三十一号』(東京高等工業学校文芸部、一九一四)目次には「講演略記」とある(山下浩監修／夏目金

之助著「漱石評論・講演復刻全集 第7巻」ゆまに書房、二〇〇二。

(14) 『淺草文庫』目次(注13に同じ)参照。

(15) 大野淳一「注解」(『漱石全集 第二十五巻』岩波書店、一九九六)。

(16) 久米博は「昭和初年に、マルセル・ブルーストの文学がわが国に紹介されたところ、必ずといってよいほど、ベルクソン哲学に言及されたものである」(注1に同じ)と述べている。また市川浩も「失われた時をもとめて」は、「知覚と記憶の往復による現実の把握の深化・拡大を示している点でもきわめてベルクソンのな作品といえよう」(『ベルクソン』講談社、一九九一)と述べている。

(17) 奥野健男「近過ぎて評価できなかった漱石」(『漱石全集第十巻』月報10 岩波書店、一九九四)によれば、『淺草文庫』第三十四号(大正四年三月十三日)は編集係菊池武男署名の「漱石先生に」と題する公開状を載せ、「直接抗議を申し込んだ学生もあつたよう」だという。

(18) 注4に同じ。

(19) ミハイル・バフチン著／望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』(筑摩書房、一九九五)。

(20) 田島節夫の翻訳(アンリ・ベルグソン『物質と記憶』(新装復刊)白水社、一九九九)および、市川浩の論(注16)では、「純粹記憶」とある。

(21) 富士川義之「文学と記憶——ワーズワス、ブルースト、ナボコフ」(『言語生活』一九八六・三)。

(22) 「硝子戸の中」(二三三)に「私が早稲田に帰つて来たのは、東京を出てから何年振になるだらう」を思い合わせれば、漱石自身身の記憶の欠落に符合することは明らかだ。

(23) 清水孝純「方法としての迂言法——『道草』序説——」(『文学論輯』一九八五・八)。

(24) 亀井俊介「『道草』を読む——曖昧さをめぐって」(『國文學』一九八六・三)。

(25) 「吉田健一著作集 第二十二巻」(集英社、一九八〇)。

(26) 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」(『文学』一九八〇・一〇)。

(27) 石崎等は前掲書(注4)における一連の『道草』論で、ブイヨンなどを援用しつつ「過去の二重性」について論じており参考

になった。

- (28) 金子明雄は「三人称回想小説としての『道草』——『道草』再読のためのノート——」(『漱石研究 第4号』一九九五・五)において、「一人称回想体」あるいは自叙伝として読まれる「読書契約」から逸脱する意味を考察しており、参考になった。
- (29) 小宮豊隆『漱石の芸術』(岩波書店、一九四二)。
- (30) 蓮實重彦「テキストとしての漱石文学 修辭と利廻り——『道草』論のためのノート」(『別冊國文學・夏目漱石事典』一九九〇・七)。
- (31) 東郷克美「『道草』——『書齋』から『往来』へ——」(『國文學』一九八六・三)。

(文学部非常勤講師)